

報告番号	※	第	号
------	---	---	---

主 論 文 の 要 旨

論文題目

近世の白話小説訓訳本に関する日本語史的研究

氏 名

馬 静雯

論 文 内 容 の 要 旨

江戸時代、『水滸伝』『今古奇観』『金瓶梅』をはじめ、白話小説を含んだ俗文学の作品が大量に日本に輸入された。日本で白話小説は、原書から訓読、通俗訳、翻案、そして読本という五つの段階を経て受容されていた。訓読された白話小説をさらに分類すると、原文の意味を解釈するため、分かりやすい言葉が文字の左側に付された「訓訳本」と、それが付されていない「訓点本」に分けられる。「訓訳」とは、中国語の原文に返り点を施したうえで、原文の右側に送り仮名と振り仮名、左側に難解な語や短文の意味を説明するための分かりやすい言葉を付けた翻訳形式であり、主に白話小説に用いられる。このような翻訳形式を使用するものが「訓訳本」である。

多くの成果が蓄積されてきた訓点資料の研究とは違い、白話小説の訓訳に関する研究には不明な点がまだ多く存在している。そこで、本研究では、白話小説の訓訳本を調査対象とし、また、訓訳本と同時期の訓点資料、当時の実際の言語生活の様相を反映するとされる口語資料における文法表現との比較を通して、訓訳本の性格、及び言語資料としての訓訳本の価値を解明することを目的とする。

序章では、本研究の背景、「訓訳」「訓訳本」の定義、「訓訳」に関する先行研究と本研究の目的、本研究で使用する調査資料、及び本研究の内容について述べた。

第1章では近世における白話小説訓訳本について紹介したうえで、『覚後禅』の刊行時期と訓訳者、及び『照世盃』の訓訳者に関する問題を検討した。また、近世期の訓訳者の交際についても言及した。

江戸時代に刊行された白話小説の訓訳本は『小説精言』（寛保三(1743)年）、『小説奇言』（宝暦三(1753)年）、『小説粹言』（宝暦八(1758)年）、『覚後禅』（宝永二(1705)年か）、『照世盃』（明和二(1765)年）という五つしかない。『小説精言』『小説奇言』の訓訳者が岡白駒であり、『小説粹言』の訓訳者が沢田一斎であることは疑いないが、『覚後禅』の刊行時期と訓訳者、『照世盃』の訓訳者に関しては疑問がある。調査によって、『覚後禅』には宝永二(1705)年の序が見られるが、その実際の刊行時期は恐らく宝暦(1751

～1764年)頃であろうと考えた。また、『覚後禅』の訓訳者「倚翠楼主人」は上方の者或は上方に長期滞在していた者である可能性が高いと考えた。『照世盃』の訓訳者については、異論があるものの、清田儋叟である可能性が高いことが確認できた。『小説精言』『小説奇言』の訓訳者岡白駒は江戸時代における代表的な唐話学者の一人であり、『小説粹言』の訓訳者沢田一斎の唐話の師である。清田儋叟は岡白駒、沢田一斎の知人のようである。以上をまとめると、近世における白話小説訓訳本の刊行時期は一七四〇年代～六〇年代に集中しており、その訓訳者は上方を中心に活躍した唐話学者ということになる。そして、様々な資料や先行研究の指摘から、彼らは互いに交渉があったことが分かった。

第2章では白話小説訓訳本の全体的な特徴を把握した。

訓訳本の右訓に現われている言葉と表現はほぼ伝統的な訓読表現を継承している。特にそれは、「麼」「像」「該」など口語体の作品で多用される白話語彙が、訓点資料で見られる表現によって訓読されているという状況から、明らかである。また、数は少ないが、訓訳本の右訓には訓点資料に見られない新たな表現「個ノ」「的ノ」「ナリ了ス」「タ」「ジャ」「ヨ」なども出現した。訓訳本の左訓は、「時代性」「地域性」という特徴を持っていると言える。これは、当時の口語を反映する「イッタイ」「タ」「ヤンワリ」、及び上方で多用される「ジャ」「ヤラ」などの言葉と表現が見られることから分かる。また、訓訳本には文レベルの左訓が現われている。文レベルの左訓には訓読文のような硬い日本語ではなく、分かりやすい自然な日本語が使われている。文レベルの左訓から白話小説の「口語訳」の初期段階の様相が窺える。また、訓訳本の右訓と左訓を、終助詞を例に比較した結果、それぞれ性格上に差異が見られることが確認できた。すなわち、右訓は全体的に文語性が強いのに対し、左訓は口語性が強い。言い換えれば、訓訳本には性格が異なる二重の言語表現体系が存在しているということである。

第3章～第5章は、訓訳本の右訓に現われる特殊な表現「タ」「ジャ」「ヨ」の使用状況の考察を通して、訓訳本の右訓の性格をさらに明らかにしたものである。

第3章では訓訳本『小説精言』『照世盃』の右訓に現われる過去・完了の助動詞「タ」を中心に考察を行った。

訓訳本『小説精言』『照世盃』の右訓における「タ」と「タリ」の使用状況を考察したうえで、訓訳本の左訓、同時期の喃本における「タ」「タリ」と比較した。その結果、訓訳本『小説精言』『照世盃』の右訓、左訓、喃本に現われる「タ」は、いずれも会話文・心話文など地の文以外の文に使用される傾向があり、かつ、さまざまな語に接続することがわかった。一方、「タリ」は、いずれの場合も地の文で多用されている。また、訓訳本の左訓と喃本の「タリ」が多様な語に接続するのに対し、訓訳本における右訓の「タリ」のほとんどは「エル(得る)」「ニル(似る)」など限られた語に接続する。

訓訳本の右訓と口語資料に現われる表現は、文体が異なる点から、形が同様であっても、用法には差異があることが予想できる。しかし、訓訳本の右訓に口語的な「タ」が使用されること、訓訳本の右訓と口語資料における「タ」の用法がほぼ一致していることから、訓訳本『小説精言』『照世盃』の右訓は当時の口語からの影響も受けていたことが窺えよう。

第4章では訓訳本『照世盃』の右訓に見られる文末表現「ジャ」を中心に考察を行った。

『照世盃』の右訓における「ジャ」の使用場面と使用者を考察したうえで、『照世盃』の右訓における「ジャ」以外の文末表現(特に「ナリ」)の使用状況、訓訳本の左訓と同時期の喃本における「ジャ」「ナリ」の使用状況と比較した。その結果、右訓の「ジャ」は主に一般階級の者の話に現われること、聞き手は話し手と対等で親しい関係を持つ者であることが分かった。このような傾向は訓訳本の左訓及び同時期の喃本における「ジャ」にも共通している。つまり、右訓における「ジャ」は、喃本で 사용되는ような当時の口語が、白話小説の訓読として現われたものである、という可能性を指摘できる。言い換えれば、『照世盃』の右訓には当時の口語からの影響が見られるということである。一方、文末表現「ナリ」の使用場面と使用者については、いずれの資料でもあまり特別な傾向が見られなかった。『照世盃』の右訓と同時期の喃本における「ジャ」「ナリ」の使用状況の相違点としては、「ジャ」と「ナリ」の用例数の多寡があげられる。すなわち、『照世盃』の右訓では「ナリ」が優勢、「ジャ」が劣勢であるが、喃本では「ジャ」が優勢、「ナリ」が劣勢であった。

第5章では「和刻三言」の右訓に現われる終助詞「ヨ」を中心に考察を行った。

訓点資料に見られない終助詞「ヨ」が訓訳本で使用されているのは、原文における中国語の助字「哩」の訓読に大きく関係している。しかし、考察によって、「哩」の訓読の際に「ヨ」を使用するか否かは、中国語の原文の内容によったのではないということが分かった。訓読語としての「ヨ」は、「哩」とほぼ同じ用法を表すと考える。その用法をまとめると、次のようになる。訓訳本の原文の会話文に現われる「哩」及びその訓読語としての「ヨ」は、誰にとっても認識可能な客観的事態を表す場面で使用されることもあれば、話し手が判断・推測・評価を行うなど、主観的事態を表す場面で使用されることもある。また、その文が表す内容は、話し手にとっては既知的な内容、聞き手にとって未知な内容である。つまり話し手と聞き手の間に、その情報に対して認識の差が存在している場合に使われる。一方、訓訳本の原文の心話文に現われる「哩」及びその訓読語としての「ヨ」は、眼前の事態に対する話し手の判断・推測・評価など主観的な内容を表す場合に使われる。つまり、話し手自身にとって既知的な情報を、自身に言い聞かせる場合に使われるということである。訓訳本と同時期の口語資料と比較した結果、両資料における終助詞「ヨ」は、どのような語に接続するか

という観点で差異が見られるが、使用場面などの観点では共通点も多い。以上の考察から、「和刻三言」の右訓には当時の口語からの影響があったと考えられる。

以上の5章の考察から、近世の白話小説訓訳本の性格に関して、次のことが明らかになった。近世の白話小説訓訳本には二重の言語表現体系が存在しているという点である。訓訳本の右訓にはほぼ伝統的な訓読表現が使用されており、文語的な性格が見られる。しかし、数は少ないが、訓訳本の右訓には訓点資料では基本的に使われない特殊な表現も現われている。特に近世の口語資料で多用される「タ」「ジャ」「ヨ」の使用状況から、訓訳本の右訓には当時の口語からの影響も窺える。一方、訓訳本の左訓は「俚俗性」「釈義性」のほか、「口語性」「時代性」「地域性」などの性格も有している。また、分かりやすい自然な日本語を用いた、文レベルの左訓も現われており、白話小説「口語訳」の初期段階の様相を反映していると言える。

近世の白話小説訓訳本の右訓に当時の口語からの影響が見られたことは、訓訳本の原文の文体に大きく関係していると考えられる。一方で、庶民文化の発達という側面も持っているのではないかと考える。また、当時の言葉が多く保存されている訓訳本の左訓は、近世話し言葉などの研究において、貴重な言語資料であることが認められよう。

本研究の調査・考察を通して、近世の白話小説訓訳本の性格の一部を明らかにした。しかしながら、課題として残った点がまだ多くある。訓訳本の左訓に使用される言葉と表現の調査、訓訳本の右訓が日本語に与える影響の検討などを今後の課題とした。